

徳川みらい学会第3回講演会



「徳川時代の『武威』と『平和』」

東京大学史料編纂所教授 山本博文氏



徳川みらい学会の第3回講演会を7月5日(土)、静岡市民文化会館で開催しました。講演会の講師は東京大学史料編纂所教授の山本博文氏。武家政権にもかかわらず、なぜ徳川時代は長い平和を実現できたのか、徳川時代の「武威」を基軸に語っていただきました。

徳川3代の対外政策

その後を継いだ徳川家康も、「武威」を根幹とした支配統治を行いました。周辺諸国との関係修復に努め、明や朝鮮との国交回復のほか、オランダ・スペインとの貿易を開始します。またキリスト教が広まると臣下が自分の言うことを聞かなくなるだろうと感じ、キリスト教信仰の禁止も行いました。その後の秀忠・家光の方針も変わらず、最終的には鎖国体制が完成することとなりました。幕府は、海外との通商を制限することや、將軍の權威を守るため紛争ができるだけ起こらないような態勢をとっていました。

信長と秀吉の時代の支配理念

戦場で勇敢に戦うことを重視し、国家の支配理念を「武篇道」において織田信長は、天下をほぼ統一した後も戦いをやめず征服までを視野に入れていました。また豊臣秀吉も朝鮮に出兵しましたが、この軍事的な威信が家臣団を惹きつけるものでありました。

建前となった「武威」

その後、中国では南下してきた清に対抗する明の遺臣が、幕府に対して軍事支援(乞師きつし)を

求めてきました。各国大名には武士である以上出陣希望を出すという、戦いに対して拒否できない「武威」があつたのですが、幕府は理由をつけて乞師の謝絶を行いました。つまり、幕府は武威を大事にし、武威という建前だけでは守つていけるが、実質的には出来るだけ紛争が起こらないような動きをとり、負けて恥をかかないことを追求するような国家体制になつていきました。

しかし、18世紀以降建前の「武威」が崩れるような事態が起ります。ペリーが来航した際には本来であれば打ち払わなければならないわけですが、戦いを挑めば負けるのは目に見えているため、避戦政策として屈辱的に開国を受け入れられました。国内では事態の説明がつかず、ついには政権の座から降りることになりましたが、「武威」という建前があつた

「武威」と「平和」

265年に及ぶ平和な時代は、「武威」を守ろうとするには戦わないことが一番だという逆説が成立した結果でした。その中で国内産業は発達し、外国との戦争によるお金の浪費もなく、国富が蓄積され、民衆も安定した生活を営むことができるようになりました。



個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。

〈お問い合わせ〉 徳川みらい学会事務局 〈TEL〉 284-9660 〈HP〉 [徳川みらい学会](#) [検索](#)